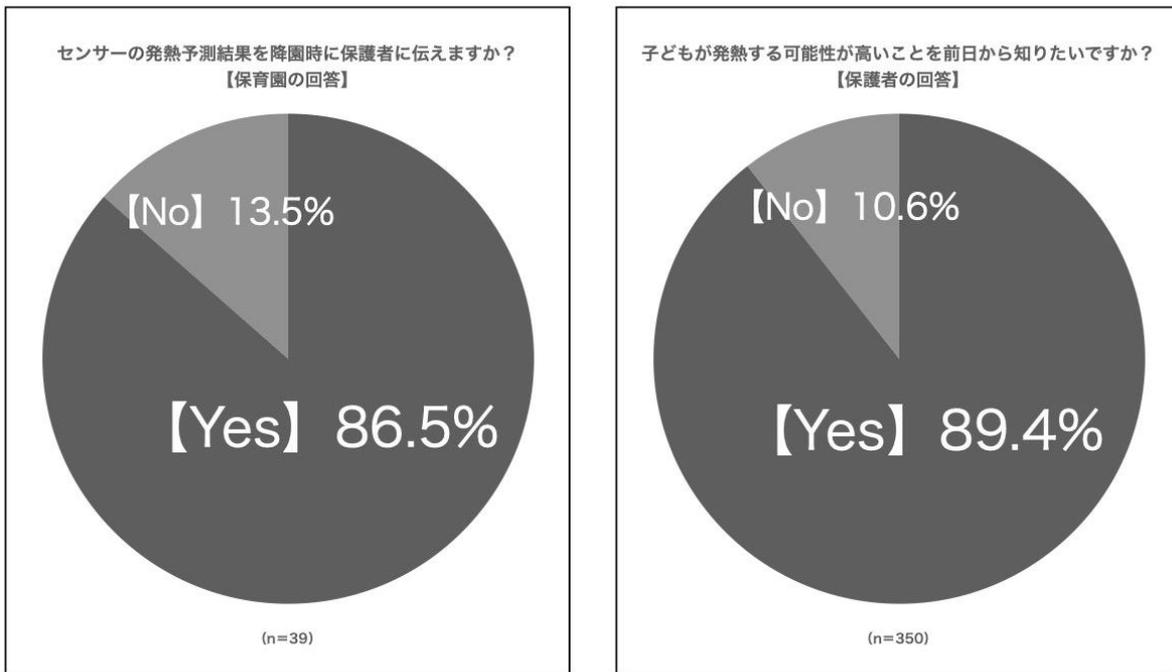


gb Opinion Report

株式会社 global bridge HOLDINGS 貞松 成

子どもの発熱予測に関するアンケートが示唆する急がれる保育業界のAI化



出所:株式会社 CHaiLD 調べ

上図は、株式会社 CHaiLD が開発した CCS センサーの発熱予測機能について、保育事業者と保護者にアンケートを実施した結果である。

CCS センサーは、もともとは保育園でお昼寝する子どものうつ伏せ寝防止のために開発されたセンサーであったが、お昼寝中の子どもの温度を計測しつづけた結果、翌日の子どもの体調を予測することが可能となった。

AI は、過去のデータに基づいて、未来を予測するものである。今回は、子どものお昼寝中の温度を収集し続けた結果、たとえ当日に発熱していなくとも、翌日に子どもが発熱するかどうかをほとんど 100%の確率で予測することが可能となった（正答率 70%以上）。

しかし、このような予測が、実際の保育現場に勤務する保育士と、保育園を利用する保護者にとって、有益かどうかは定かではなかったため、アンケートを実施した。

その結果、保護者（n=348）への、「翌日、お子さんが発熱する可能性が高いことを前日から知りたいですか？」という質問に対しては、約 9 割の保護者が「Yes」と回答したことがわかった。

次に、「お迎えの時、明日お子さんが発熱する可能性が高いことを保育士から伝えられた場合、どうしますか？」という質問に対しては、「子どもの様子を見る」が 27.0%、

「家族で仕事の手配を調整する」が 25.5%、「保育園を休むことを検討する」が 8.5%、となった。

つまり、子どもが翌日に発熱するかどうかは「知りたい」し、知りたい理由は、発熱の可能性を事前に知ることができたら、翌日の仕事を調整することが可能になるためであるということだ。

同様に、保育園（n=37）に対してアンケートを実施した結果、CCSセンサーの発熱予測機能によって、翌日の子どもの発熱が予測できた場合、降園時に保護者に伝えるかどうかを質問した結果、86.5%の保育園が「伝える」という回答だった。

したがって、翌日、子どもが発熱するかどうかが予測できた場合、ほとんどの保護者が保育園からの発熱予測結果を知りたいと思っており、ほとんどの保育園も保護者に発熱予測結果を伝えたいという、両者の意見が一致する結果となった。

保育園向けのアンケートの他の回答に目を向けてみると、「普段保育をされていて、子どもの体調が悪そうだと感じるきっかけは何ですか？」という質問に対して、「顔色」で判断する保育士が89.2%と最も多く、次いで、「機嫌」が75.7%、「食欲」が59.5%、「行動が少ない」が43.2%、「排便」が27%という結果であった。

つまり、保育士は子どもの健康状態を「顔色」や「機嫌」など、数値化できない情報に、自分の直感を加えて判断しているという現状に対し、CCSセンサーの発熱予測は子どものお昼寝中の温度の推移を数値化して解析した結果の予測であるため、保育士の直感を強力に補ってくれることになるだろう。

以上のように、保育園と保護者の意見が一致しているため、保育園での発熱予測がいずれ当たり前の世の中になるだろう。そうなった場合、もっとも利益を受け取ることができるのは、子どもである。子どもは、自分自身が発熱するかどうかはわからない。大人も、子どもの体調が悪そうに見えたとしても、発熱はしていないため断定的な判断はできない。しかし、結果的に翌日に発熱はするのである。そうなった場合、当然、翌日も保護者は子どもを連れて登園し、登園後に発熱するのである。その場合は、保育士は保護者へお迎えの連絡の義務があるため連絡をして、連絡を受けた保護者は急いで仕事を調整して、お迎えに向かわなければならない。その間、子どもは、本来予測できた発熱に対して、耐えるしかないのである。

こうした不幸な事態を未然に防ぐことの便益は大きいため、保育業界におけるデジタル化とAI化が急がれる。

●当レポートは、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。当レポートのご利用に際しては、ご自身の判断にてお願い申し上げます。また、当レポートは執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一的な見解を示すものではありません。なお、当レポートに記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当レポートは著作物であり、著作権法に基づき保護されています。当レポートの全文又は一部を著作権法の定める範囲を超えて無断で複製、翻訳、翻案、出版、販売、貸与、転載することを禁じます。